

泉のひとり

グレーチヒェンとリースヒェン、水瓶を持ちて。

リースヒェン

ベルベルヒェンのことをなんにも聞かなかった？

グレーチヒェン

ちっとも。私滅多に人中に出ないの。

リースヒェン

屹度本当よ、ビジュレが今日私に話したもの！
あの人頭馬鹿なことをしたんだってさ。
上品ぶったってそんなものよ！

グレーチヒェン

どうしたと云うの？

リースヒェン

大変なのよ！
食べるにも飲むにも二人養うようになったんだって。

グレーチヒェン

まあ！

リースヒェン

これであるようになったと云うものだわ。
随分長く、あの人あの男に附いて廻っていたわねえ！
やれ散歩だの、
やれ郊外や舞踏場へ連れて行くだの、
何処でも一番の女らしく見せつけて歩いて、
いつでも詰め饅頭(ぱてー)や葡萄酒で御機嫌とっていたわ。
それだもんで、自分も自惚れていい女の気になってさ、
本当は、あの男から贈り物を貰うのを
恥ずかしいとも思わないほど、性根が腐っていたのだわ。
舐め合ったり吸い附いたりしてさ。
とどのつまりは花も散ったというわけさ。

グレーチヒェン

可哀そうねえ！

リースヒェン

あんな人が可哀そうなの！
私なんか糸紡ぎが忙しかったり、
かあさんが夜外へ出さなかったりしている間に、
あの人、色男に甘そうに寄り添っていたり、
扉口の腰掛けの上や暗い小路の中で逢い引きして、
時が経つのも知らずにいたのだわ。
今こそすっかり頭を下げて、
罪人(つみびと)襦袢を着て教会の贖(あがな)いをするがいいわ！

グレーチヒェン

でもその人、屹度お上さんに持つでしょう。

リースヒェン

そんなことをしたら馬鹿よ！気の利いた男だもの
余所でもまだいくらも勝手な真似が出来るわ。
もう行ってしまったんだって。

グレーチヒェン

ひどいわねえ！

リースヒェン

その男を攫(つか)まえたって、あの人やっぱりひどい目に逢うわ。
若い衆は青葉の環飾りをひき破くし、
私達は切藁を門口へ蒔いてやるわ。(退場)。

グレーチヒェン

今までは私もどんなに勇み立ってけなすことが出来たでしょう！
可哀そうな余所の娘(こ)が間違いでもしたときには。
余所の罪咎を責めるとき、言っても言っても私の舌は、
どんなにたたき足りない気がしたでしょう！
人のすることが黒く見えた。自分で一層それを黒く塗った。
それでも黒さがまだまだ足りなかった。
そうして自分に過ちがないのをいいことに、さもえらそうに威張っていた。
それなのに今は自分が罪に晒されている！
だけど---私を其処へ追いつめた色々のことは、
ああ！あんなに好かったのに！ああ、あんなになつかしかったのに！

廊壁に沿える巷

壁龕の中に悲しみの聖母の祈願像。その前に花壺。
グレーチヒェン壺に新たなる花を挿す。

グレーチヒェン

ああ、こちらをお向き下さいまし、
痛み多き御母、
み恵み深く、あなたの御顔を私の悩みにお向け下さいまし！

御胸には劍、
千々の痛みを御身に覚えながら、
御子の死を見上げていらっしゃいます。

御父をお見上げなされて、
御子と御身とのみ悩みのために
歎きの溜息を空高くお送りなさいます。

誰が感じてくれましょう？

私の骨々に
痛みがどんなに貫(ぬ)き徹(とお)るかを。
何が私の哀れな胸の此処をせつなくし、
何のためにそれがわななき、何を欲しがっているか、
それを御存知なのはあなたばかり、あなたお一人ばかりでございます！

私が何処へ参りましても、私の胸の此処が
どんなにせつなく、どんなにせつなく、どんなにせつなく
なって参ることでございましょう！
私が一人ぼっちになるとすぐに、

泣けて、泣けて、泣けて、
心臓が破れるばかりでございます。

窓の前の花鉢を
私は涙で濡らしました。ああ！
私が今朝早く
差し上げます此花を手折りましたときに。

私の居部屋の中へ、鮮やかに
太陽が高く差し込みましたときにも、
私は、あらゆる歎きをしながら、
もう起きて床に座って居りました。

御助け下さいまし！恥辱と死から私をお救い下さいまし！
ああ、こちらをお向き下さいまし、
痛み多き御母、
み恵み深く、あなたの御顔を私の悩みにお向け下さいまし！

夜

グレーチヒェンの扉の前の街路。
ヴァレンティン・兵士・グレーチヒェンの兄。

ヴァレンティン

誰でも自慢話をしあう
酒の席に俺がこう座っていたとき、
そうして仲間の者が娘の花を
とりどり声高に褒めそやして、
杯を満たして褒め言葉を飲み干していたとき----
頬杖をつきながら、
俺は落ち着き払って座って居て、
自慢話をみんな聞いた上で、
薄笑いをしながら髯を撫でて、
なみなみと注がせて手に持ちながら、
こう言うのだ----「流儀々々でみんなよかろう！
併し國中捜して一人でもいるかい、
内の可哀いグレートルと比べ物になるのが、
俺の妹に水でも差し上げられるのが？」

賛成！賛成！チリン！チャリン！こんな具合に杯が廻ったものだ。
味方の奴等が怒鳴ったものだ----「彼奴の言葉に嘘はない、
あれは女性全体の飾りだ！」
これで自慢組がみんな黙ってしまったものだ。
それがどうだ！----頭の毛を搔き毟(むし)っても、
壁の上に駆けのぼってももう追い附かん！----
当て擦りを言ったり、鼻に皺を寄せたりして、
どの恥知らずでも俺に悪口を言いやがる！
俺は筋の悪い借金がある奴のようにじっと座っていて、
何気ない人言(ひとごと)の端々に冷や汗を搔かなくてはならぬ！
奴等を片っ端から擲(なぐ)り付けてやりたいが、
どうも奴等を嘘つきだとは云えないのだ。

なんだ、やって来るのは？なんだ、こそこそ来やがるのは？
俺の睨みが違わなけりゃあ、あれは奴等二人だぞ。

あいつがそうなら、裸身を引っ攫(つか)んで
此の場を生けては返さないぞ。

ファウスト。メフィストーフェレス。

ファウスト

彼処の聖器部屋の窓から
常灯明の火影が上の方に差していて、
それが傍(わき)へ行くにつれ段々弱く朧(おぼ)ろになって、
闇が四方から押し迫って来るように！
そんな風に僕の胸の中も闇夜の思いがする。

メフィストーフェレス

僕の心はあのやつれ猫のようですね、
あいつはあの火見梯子の傍を忍んで、
それから壁をこすって音もなく曲がって行くでしょう。
それでも僕は頗(すこぶ)る道徳的な気持ちですね、
盗人(ぬすっと)根性もちよっぴりあり、交尾(さかり)ごころもちよっぴりある。
僕の手足の節々にはもうあの素晴らしい
ヴァルプールギスの夜が沁みて来た。
もう明後日がそれなのだ、
その時、何故夜っぴて寝ぬかがわかるのですぞ。

ファウスト

あの向こうの方に火がちかちかするのが見えるが、
あんなにしているうちに宝がせり上がって来るのだろうね？

メフィストーフェレス

もうじきに参りますぞ、
宝の鍋を掬い上げるお喜びが。
僕は此の間ちょっと横眼を使って見ましたがね、
素的な獅子紋銀貨がその中にありますよ。

ファウスト

金細工はないかい、指輪はないかい、
僕の可哀い女を飾られるような？

メフィストーフェレス

成程そういうものも見えたようです、
真珠を繫いだ細紐らしかったが。

ファウスト

丁度いい！手土産なしで
彼処へ行くのは苦勞だからなあ。

メフィストーフェレス

ただで御馳走をよばれたって、
そんなことを気に病んでいちゃ駄目ですぞ。
さあ、空に一ぱい星が輝いているこういう晩に、
貴君に一つ本当の芸術品という奴を御聴に達しましょう。
あの子に道徳的な歌を聞かせて、
愈々以て迷わせてやるという寸法ですよ。
(ぎたあに合わせて歌う)。

可哀お方の門口で、
カタリナ、御前は
何していやる、
こんなに早い夜明け時。
よすがよい、そりゃよすがよい！
奴はお前を
娘で入れる、
娘で戻しはしないぞえ。

お前方、よく気を御付け！
済んでしまえば
もうおさらばよ、
みじめな、みじめな未通女(おぼこ)達、
自分の体が可哀けりゃ
盗人(ぬすつと)可哀と
うじゃけちゃならぬ、
指に指輪がはまるまで。

ヴァレンティン(現れ出づ)。
此処で誰をおびき出すのだ！畜生！
詛われた鼠捕り野郎！
そら、初手(しょて)は鳴り物だ！
そら、その次は歌い手だ！

メフィストーフェレス
ぎたあは真っ二つ！これじゃ防げん。

ヴァレンティン
今度は脳天の縫い目だぞ！

メフィストーフェレス(ファウストに)。
先生、尻込み御無用！さあ遣ったり！
ぴったり僕にくっついて、僕が指図をする通りに。
その羽箒を引っこ抜いた！
まっすぐ御突きだ！僕は受け手だ。

ヴァレンティン
これを受けろ！

メフィストーフェレス
受けずにどうする？

ヴァレンティン
これも！

メフィストーフェレス
承知だ！

ヴァレンティン
対手は悪魔らしいぞ！
こりゃどうだ？もう手が痺れて来る。

メフィストーフェレス(ファウストに)
御突きだ！

ヴァレンティン(倒る)
残念！

メフィストーフェレス
これででぶ公おとなしくなりやがった！
さあ逃げましょう！僕達は早速消えてしまわなけりゃあ----
もう人殺しじみた悲鳴が始まりました。
僕は警察の方は得意だが、
どうも重罪裁判の方は真っ平だ。

マルテ(窓際にて)
出合って！出合って！

グレーチヒェン(窓際にて)
あかりを見せて！

マルテ(同前)
罵り合うやら掴み合うやら、叫び合うやら切り合うやら。

人々
一人は其処にもう死んでいらあ！

マルテ(出で来たりつつ)
殺し人(て)は逃げましたの？

グレーチヒェン(出で来たりつつ)
此処に倒れているのはどなた？

人々
お前のかあさんの息子よ。

グレーチヒェン
まあ、まあ！何てことでしょう！

ヴァレンティン
俺は死ぬんだ！口に言うのは瞬く間で、
それより先に死んでしまわあ。
おい女子達。なんで其処に立っていて、吼えたり歎いたりするのだよ？
傍へ寄って、俺の言うことを聞いてくれ！

(一同彼を取り巻く)
おい、グレーチヒェン、見ろ！お前はまだねんねえで、
まるで世間がわからない、
我が身の始末を拙(まず)くする。
俺はただ内証話にお前に言うのだがな----
お前はもうばいただよ、
それが又似合いなのだ。

グレーチヒェン
まあ、兄さん！ああ！なんでそんなことをおっしゃtの？

ヴァレンティン

神様に戯談を言うのはよせ。
残念ながら出来たことは出来たことだ、
なれるようになって行くだろうよ。
お前は一人とこっそり始める、
間もなく奴等の数が殖(ふ)える、
それが一打(だーす)となって来ると、
お前は町中の慰み物だ。

恥が初めて産まれるときには、
こっそり世間へ産み落とされる、
人はそいつの頭にも耳にも
闇の衣をかぶせてしまう。
一そ殺したいとさえ思う。
それでもそれは育つ、大きくなる、
さあそうなると、昼日中にも顔を晒す、
綺麗になったわけでもないのに。
顔が醜くなればなるほど
そいつは益々日の光を見たがるのだ。

もう俺が眼には見えるようだ----
正当(しょうとう)な町の人達がみんな、
時疫で死んだ死骸を見るように、
おい、ばいた！手前をわきに避(よ)ける時が。
お前の心臓は体の内で縮かむだろう、
人が眼の中を見すえるときには！
もう金の鎖もつけられない！
お寺でももう祭壇へは近づけない！
美しい笹縁の襟飾りをつけて
雑踏で楽しむことも出来ない！
暗い歎きの隅っこの方で、
乞食や片輪の中に身を隠して、
よしや神様が御赦しになっても、
此の地上では詛われるのだ！

マルテ

お前さんの魂に神様のお恵みを願いなさいよ！
まだ悪口の罪を背負い込もうと思うの？

ヴァレンティン

そのかさかさの体に喰(くら)わしてやる事が出来たらなあ、
おのれ恥知らずの口入れ嬢(かかあ)奴！
そうすりゃ俺の罪滅ぼしも
たっぷり出来ようというものだ。

グレーチヒェン

まあ、にいさん！何という地獄の苦しみでしょう！

ヴァレンティン

おい、涙なんかおいてくれ！
お前の名誉を捨てたのが、
俺の心臓の一番ひどいお突きだった。
俺は死んで眠って神様のところへ行く、

軍人として、男らしく。(死す)。

寺院

勤行、風琴、聖歌。
多勢の中に交じりてグレーチヒェン。グレーチヒェンの背後に呵責の霊。

呵責の霊

グレーチヒェン、昔はまるで違っていたな----
お前がまだまるで罪がなくて、
この祭壇に進み出でて、
擦り切れた小本をひろげて、
半ばは子供の戯れに、
半ばは神様を心に持って、
祈禱を片言に唱えた時分は！
グレーチヒェン！
お前の頭は何処へ行った？
お前の胸の中にあるのは
何という悪行だ！
お前は母の靈魂の為に祈るのか、
その人はお前の咎(とが)で、長い長い苦艱(くげん)の中へ、眠ったまま滑り落ちたのに？
お前の鬨には誰の血がある？
----それにお前の胸の下には
もう泉のように動き始めて、
お前をも自分をも、末恐ろしい今の現(うつつ)に
悩ましているものがあるではないか？

グレーチヒェン

苦しい！苦しい！
心の中を往ったり来たりして
私を責めるこの思いが
忘れられたら！

合唱

Dies irae, dies illa
Solvat saeculum in favilla.

[怒りの日、この日こそ
世を溶かし、灰に返す日]。
(風琴の響き)

呵責の霊

神の怒りお前を襲う！
喇叭(らっぱ)が響く！
墓が振動する！
そうしてお前の心臓は、
灰となれる憩いから
炎の仲の悩みへ
再び蘇(よみがえ)りを受けて、
慄え上がるのだ！

グレーチヒェン

私は此処を逃げ出したい！
あの風琴は私の呼吸(いき)を

詰まらせてしまうようだ、
あの歌は私の心臓の
底の底を溶かしてしまうようだ。

合唱

Judex ergo cum sedebit,
Quidquid latet adparebit,
Nil inultum remanebit.

[審判者その座に着けるととき、
隠されたるもの皆露われむ、
露われざるもの一つも無けむ]

グレーチヒェン

ああ狭苦しい！
壁の柱が
私を押し込める！
円天井が
私を押し潰す！----風を！

呵責の霊

勝手に隠れろ！罪や恥は
隠しおうせるものではないぞ。
風か？光か？
御生憎だなあ！

合唱

Quid sum miser tune dicturus?
Quem patronum rogaturus?
Cum vix justus sit securus.

[あさましき我、その時何をか言わむ？
如何なる人にか庇護を求めむ？
義人すら猶安んぜざるを。]

呵責の霊

浄められたる者はお前に
顔を背けるぞ。
お前に手を差し出すとき、
穢れなき者は身慄いするぞ。
ああ！

合唱

Quid sum miser tune dicturus?
[あさましき我、その時何をか言わむ？]

グレーチヒェン

御隣の方！瓶を貸して！----(喪神して昏倒す)。

ヴァルプールギスの夜

ハルツ山中。シールケ及びエーレント附近。
ファウスト。メフィストーフェレス。

メフィストーフェレス

箒の柄が欲しかありませんか？
僕は牡山羊の一等逞しい奴が欲しいですな。
目的地へはこの道をまだ仲々歩かなくてはなりませんぜ。

ファウスト

僕の足がまだしゃんとしている間は、
この瘤木の杖で沢山だ、
道を縮めたって何になるもんか！ ---
谷間(あい)の迷路をゆっくり辿って、
泉の絶えず湧いてたぎち落つる
この岩に攀(よ)じ登るなんぞが、
こういう路の薬味となる楽しみなのだ！
春はもう白樺の梢に動いて、
檜さえもうそれを感じている。
我々の手足にもそれが利いて来ない筈があるろうか？

メフィストーフェレス

いやはや、僕なんぞはちっともそんなものは感じませんなあ？
僕の体は冬景色です。
この行く路に雪や霜があればいいと思うほどですよ。
どうです、あの赤い月の欠けた姿が
時に後れたおぼめきで悲しげに差し昇って来るではありませんか、
そうして覚束なく照らすので、一足毎に
木や岩角に躓きそうでなりません！
御免蒙って、一つ鬼火を呼びますよ！
彼処に一つ見えますね、陽気に燃えている奴が。
おうい！兄弟！一つこっちへ来て貰いたいがねえ。
なぜ君はそんなに無駄に燃えているんだい？
頼むぜ、登り道を照らしてくれ！

鬼 火

仰(ぎょう)を畏(かしこ)んで、私の軽い性分を矯(た)めて
どうにか旨く遣りたいものですがね。
ただ稲妻形が、普段は私の歩き振りでしてね。

メフィストーフェレス

おや！おや！お前は人間の真似をする気だな。
真っ直ぐに行って貰おうじゃないか、悪魔の名にかけて！
きかないとお前のちらちら命を吹き消してやるぞ。

鬼 火

わかっていますよ、お前さんがうちの旦那でいらっしゃることは。
喜んで仰せに従うつもりですよ。
でも御含みを願いますぜ！今日は山中魔にとつつかれたような気違い騒ぎと来ていま
す。
鬼火が道案内を申し上げる段になれば、
少しは大目に見て戴かなくては。

ファウスト、メフィストーフェレス、鬼火(掛け合いの歌にて)

夢と蠱(まじ)との境に
我等入りぬと覚ゆ。
善く導きて、汝(なれ)が名を成せ！

我等疾く進み行き、
荒れし広場(ひろにわ)に到らぬため。

木立は木立を追いて
馳せ過ぐる事如何に速き。
巖角は頷(わ)き垂れて、
長き岩の鼻々
如何に鼾(いびき)し、如何に嘯(うそぶ)く！

石を縫い、草を穿(うが)ちて
小川、谷水ぞ急ぎ落つる。
聞こゆるはせせらぎか？聞こゆるは歌か？
聞こゆるは優しき恋の歎き、
彼の天(あめ)なりし日の声か？
我等何をか待ち、何をか恋うる？
さて木魂は、過ぎぬる日の
物語めきて響きをぞ返す。

ウーファー！シューファー！近く響き、
木兔(みみずく)も梟も檉鳥(かしどり)も
皆いまだ眠らでありや？
草叢縫うは山椒魚か？
脚長く、腹肥りたり！
木の根は蛇に似て、
岩間、小石の中よりぬめり出で、
怪しき帯を延べて、
我等を嚇(おど)し、我等を捕らえ、
生ある如き剛(たけ)き木瘤より
ポリプめく手足さしのべ、
旅人を遮(ささ)う。鼠あり、
毛色千々に、群れなして
苔を縫い、草原を縫う。
螢火は群れ夥多(あまた)
列なして飛び
人迷わさむ導きぞする。

我に言え、我等留まれりや、
はた進めりや？
物は皆、物は皆、旋(めぐ)ると覺し、
岩や木は、顔しかめ、
又鬼火ども数殖えて、
ふくらみぞ行く。

メフィストーフェレス

しっかり僕の着物の端(はし)を掴まえていなさい！
此処は中の峠のようなところで、
その山間(あい)に金神(マンモン)が輝くのを
見て、人が喫驚(きつきょう)するところです。

ファウスト

如何にも不思議だねえ、谷々を貫いて
東明(しのめ)らしく鈍い光がおぼめいて居るのは！
おまけにそれは深淵の

深い顎(あぎと)の中までも差し込んでいる。
彼処には蒸気が立ち、其処には瓦斯が棚引き、
此処には火焰が霧や靄の間から輝き立つ。
見る間にそれは細やかな糸のように這い、
やがて泉のように迸り出る。
此処でそれは幾百となき脈を張って
谷間を埋め尽くしてうねって居るし、
又此処の蹙(せばま)った隅では
忽ちわかれて一つ一つとなっている。
彼処では間近に火花が飛び散っていて、
金の砂子(いさご)を撒き散らしたようだ。
だが見たまえ！あの岩壁は
下から上まで一面に燃えているね。

メフィストーフェレス

マンモン君はこの御祭りに、素晴らしい
御殿の燈飾(ひかざ)りをしたじゃありませんか？
君がこれを見られたのは仕合わせですぜ。
もう莫大もない御客の臭いがして来ます。

ファウスト

どうだ、暴れ狂いながら吹いて通る疾風(はやち)は！
僕の項(うなじ)に吹き当てる力と云ったらないなあ！

メフィストーフェレス

この巖のよぼよぼの肋骨につかまり給え、
それでないと彼奴、この谷底に君を吹き飛ばしてしまいますぜ。
霧が立って夜の闇を濃くするな。
御聞きなさい、森中がめりめりする音を！
脅かされて梟奴が飛びだしやがる。
お聞きなさい、とわの緑の殿堂の
柱がぴりぴり砕けるのを。
枝はぎいぎいって折れる！
幹はごうごう恐ろしく唸る！
根はきしめいて大口を開く！
恐ろしくこんがらがって重なり合って
倒れるとき、樹はみんな悲鳴をあげる、
そうして毀れ物で埋まった絶壁の上を
風はひゅうひゅう吼えて通る。
君には上の方で声のするのが聞こえますか？
遠くの方でも近くでも？
あれですぜ、あれが山中流れて広がっている
暴れ狂う魔法の歌ですぜ！

魔女達(合唱す)。

ブロッケンへと、魔女の御越しだ、
切株黄色で、苗床緑だ。
彼処にや大した人数が寄りおる。
ウリアン様は上に御出でだ、
そこで岩角、木の根を超え行く、
魔女はへの字だ、牡山羊はくの字だ。

声

バウボ婆さんが一人で来ます、
孕(はら)み豚に乗っていますね。

合唱

人柄次第で崇(あが)めにやなるまい！
バウボの小母御は先(さき)だよ！先達！
どえらい冢(いのこ)だよ、おまけに身持ちだ、
勢揃えして魔女がついていく。

声

どの道から来たのだえ？

声

イルゼンシュタインを越えてさ！
梟の巣の中を覗いて見たの。
大きな目玉をむいたよ！

声

地獄まで行きな！
なぜそんなに急いで騎(の)ってくのさ！

声

わたい、ひっかかれちゃった、
この傷を見な！

魔女(合唱)

道は広いし、行く先や長いし、
何ちうこったよ気違い急ぎは？
火搔きはずつつく、箒は引っ搔く、
小僧はむせるし、身持ちははじける。

魔女の親方(分団合唱)

こっちはのろのろ、家(うち)での蝸牛(ででむし)、
誰でも女はお先へでしゃばる。
それもその筈、悪魔の見舞いにや、
女は千歩(あし)御先へござるわ。

他の半団

それをこちとら格別気にせぬ、
女は千歩(あし)踏まにやあ行かれぬ。
女がせかせか急いだところで、
一跳(はね)はねれば男の勝ちだよ。

声(上にて)

一緒に御出でよう、巖(いわ)の湖(うみ)からも一緒にお出でよう！

声(下より)

わたし達も上がって行きたいのだがねえ。
わたし達、御洗濯してすっかり白光大りにしているがねえ。
それでも一生赤ん坊は出来ないのだよう。

二部合唱

風は吹き息(や)む、星奴は逃げる。

曇った月奴はひょいと顔隠す。
魔法の合唱唸りをあげりゃ
千の火花が飛んで散る。

声(下より)

待ってよう！待ってよう！

声(上より)

岩の割れ目から呼ぶのは誰だよう？

声(下にて)

おいらも連れてよう！おいらも連れてよう！
おいらはもう三百年掛かって登っているのだがねえ、
まだ嶺まで行かれないんだがなあ。

二部合唱

箒も載せるし、撞木(しゅもく)も載せる、
火掻きも載せれば、牡山羊も載せる。
今夜登られない奴は、
生涯駄目な男だぞ。

半成魔女(下にて)

わたい随分長いこと、ちょこちょこ追っかけているのよ、
皆さんもうあんなに向こうに行くのにねえ！
うちにいたってじっとしてはいられないし、
此処でも旨い事にありつけないし。

魔女の合唱

膏薬(あぶらぐすり)は元気を付ける、
どんな檻樓(ぼろ)でも帆に掛けられる、
あり合う盥(たらい)が立派な舟だ。
今日飛ばぬ奴、一生飛べぬ。

二部合唱

こっちは嶺(いただき)めぐって進む、
勝手に地びたをこすって歩け。
広い遙かな荒れ地を蔽え、
魔女を主義なるその群れで。
(半成魔女等腰を卸す)。

メフィストーフェレス

押し合ったり突き合ったり、盲急ぎをしたりどたばたしたり！
しゅっしゅと鳴ったりぐるぐる舞いをしたり、ひっぽったりぺちやついたり！
光ったり、火を散らしたり、臭味(くさみ)を出したり、燃え立ったり！
これがほんとの魔女の世界だ！
ぴったり僕について御出でなさい！そうせんとはぐれますよ。
君は何処です？

ファウスト(遠くにて)。

此処だ！

メフィストーフェレス

なに？もう其処まで押されたのですか？

これじゃあ家柄を振り廻さなくてはなるまい。
どいた！ヴォーラント閣下の御通りだぞ！どいた！平民共、いい子だ、どいた！
此処です、先生、つかまりなさい！一跳びとんで
この雑踏から抜け出しちゃいましょう。
これじゃあんまり気違いすぎる、こちとらでさえ辟易する。
ちょっと離れて彼処に、一種特別な色で光っているものがありますね。
僕は何やらあの雑木林にひき付けられる。
来なさい、来なさい！
彼処の中へすり抜けましょう。

ファウスト

君は旋毛(つむじ)曲がりの精霊だなあ！好いわ！好きなところへ連れて行け。
併しこれは随分気の利いた遣り方だと思うなあ。
ヴァルプールギスの夜にブロッケンへ来て、
好き好んでこんなところへ避(よ)けてしまうのは。

メフィストーフェレス

まあ彼処を御覧なさい、何という多彩な炎でしょう！
あれは面白そうな集(くらぶ)りですぜ。
小人数の中だと一人ぼっちになる心配がありません。

ファウスト

だが僕は上へ行きたいなあ！
もう火の光も渦巻く煙も見えている。
彼処へ大勢の者が魔王目当てに流れ込んでいる。
其処で多くの謎が解ける筈だ。

メフィストーフェレス

ところが又多くの謎が結ばれるのです。
大きな世界はただがやがやいうに任せて置いて、
こちとらはこの静かな場所に居付くとしましよう。
これが昔からの仕来りじゃありませんか、
大世界の中に幾つも小世界を拵えるのが。
彼処に若い魔女が素っ裸のままで見えますね、
利口に体を包んでいるのが年寄りです。
親切にしておやんなさい、僕のお付き合いだと思っただけでも。
労少なくして楽しみは大きいです。

おや、何か楽器の音がきこえて来るな！
詛われたがちゃがちゃ奴、そうもあいつには馴れるより外はありません。
一緒に来なさい！一緒に来なさいよ！外に仕ようがありません。
僕が奴等に近寄って、君を仲間に連れ込みます、
君は改めて礼を言うでしょうぜ。
どうですな、君？どうして、決して狭い面積ではありませんぜ。
まああちらを御覧なさい！果てが見えないぐらいでしょう。
百箇所の火が列をなして燃えています。
踊りを踊る、しゃべくる、煮焚きをする、酒を飲む、色事をする。
どうです、これより好い事が何処にあります。

ファウスト

ところでこの仲間には入り込むには
君は魔法遣いで行くつもりか悪魔で行くつもりか？

メフィストーフェレス

勿論僕は微行で行くのに随分馴れていますかね、
それでも参賀の日には勲章を見せますよ。
膝紐が僕を目立たせはしないけれど、
でも馬の脚が此処では尊いものに通用しますぜ。
君には彼処の蝸牛が見えますか？彼奴は這い寄って来るでしょう。
彼奴、例の触れ探る眼玉で
もう僕の只者ではないことを嗅ぎ付けたのですな。
仮令(たと)い僕がその気になっても、どうも此処では隠しきれません。
さあ御出でなさい！焚き火から焚き火へと伝って行きましょう。
僕が媒人で君が嫁探しの御当人だ。
(消え掛かる焚き火を囲(かこ)める数人に。)

御老人方、貴君方はこんな隅っこのところで何をして御出でです？
構わず真ん中へ出て、あの大騒ぎと若い奴等の酒盛りとに
取り囲まれていなすったらよかりそうなものですがなあ。
本当に一人になれるのは、誰でもうちの中ばかりですよ。

将 軍

誰が国民に信頼することが出来るものか！
人があれほど奴等のために功を立てたのに。
民衆に於けるは猶婦女子に於けるが如く、
いつでも若い者が上に立てられるのじゃ。

大 臣

今の世はあまりに右道から遠ざかっていますな。
吾輩は善良な古老を賞讃する。
我々が何事につけても通用していた時代こそ
全く中正な黄金時代ですよ。

成り上がり者

私どもは勿論馬鹿じゃありませんからね、
しちゃいけないことも随分しましたさ。
ところが今は世間が丸でわやになりましたよ、
私どもが、握ったものを離すまいと思うときになって。

著 作 者

穩健で賢明な内容の本を読みたがる人間なんか
今時一体どこにあるでしょう！
今の生若い連中と来た日には、
これほど小利口になったことは曾(かつ)てないでしょうね。

メフィストーフェレス

(忽ち老いさらばいたる姿となる)。
私もお暇乞いに魔女の山へ登って参りましたが、
どうも民衆は最終審判を受けるところまで来ているように思えますね。
内の小樽の酒の走りが悪くなると、
世界も下り坂になって来ますて。

道具屋の魔女

旦那様方、そう素通り遊ばすなよ！
こういう好い折をお逃がしになってはいけません！
まあ品物をよっく御覧なさいまし。

ここのところ、随分いろんなものがございますよ。
それも私の店の品物と来ては、
みんな天下一品で、
人間と世界とにどえらい禍(わざわい)を
起こしたことの無い物は一つだってございません。
血を流したことの無い七首(あいくち)もなく、
大丈夫でいた体へ、命取りの熱い毒を
注ぎ込んだことの無い杯もなく、
可哀い女をたらず種とならなかつた
身飾りもなく、味方の盟を破ったり、
敵を背後から刺し殺したりしたことの無い剣もございません。

メフィストーフェレス

おい小母さん！御前さんには時代がわからないね。
した事は出来た事だ！出来た事はした事だ！
新物商売に精を出しなよ！
こちとらを牽き付けるのは新物ばかりだ。

ファウスト

どうも自分で自分がわからなくならねばいいがなあ！
兎に角これは大市とでも名づけて置くとするか！

メフィストーフェレス

この渦巻く群衆がみんなのぼりたがって押すのです。
君は押すつもりで押されませぬ。

ファウスト

あれは一体誰だい？

メフィストーフェレス

念入りに御覧なさい！
あれはリリトです。

ファウスト

誰だって？

メフィストーフェレス

アダムの先妻です。
あいつの美しい髪に気を着けなさいよ、
あいつがそれ一つを自慢にしているあの飾りに。
あれを餌に若い男を攫(さら)えようもんなら、
めったに放しっこはありませんから。

ファウスト

彼処に二人座っているね、お婆さんと若いのが。
あいつらはもう存分跳ね廻ったらしいね。

メフィストーフェレス

なに、今日は休憩なんぞはありません。
大丈夫また踊れますよ。さあ、御出でなさい！ひっぱり出しましょう。

ファウスト(若き方と踊りつつ)

いつか俺(おり)や見た、好い夢を。

一本林檎の木があった、
むっちり耀く実が二つ、
牽かれてのぼって行って見た。

美 女

そりゃ楽園の昔から
男の大変好きな物、
わしゃ嬉しゅうてたまらない。
私の庭にもそれがある。

メフィストーフェレス

いつか俺(おり)や見た、凄い夢。
其処に割(さ)かれた木があった、
その木に××××一つ。
×××けれども気に入った。

老 婆

わたしゃ御会釈申します、
馬の蹄がある騎士に。
一つ××の御用意を、
××がおいやでないならば。

臀(しり)の視霊者

誼われた奴等め！何をしやがるのだ？
幽霊には決して本式の脚がないことは、
とっくに証明されているじゃないか？
それなのに貴様等は踊るのだな、我々人間共と同じように！

美 女(踊りつつ)

あの人は私達の舞踏会へ来てどうしようというのでしょうか？

ファウスト(踊りつつ)

なに！彼奴は何処へでも来る奴さ。
他(ひと)が踊ると自分は審査する気でいやがる。
一足毎に文句がつけられなければ、彼奴には
その踏み足はなかったと同じ事なのだ。
とりわけ彼奴が嫌いなのは、こっちが前の方へ踊って出ることだ。
彼奴が自分のうちの古水車場でやっているように、
輪を描いて廻っていさえすれば、
とにかく彼奴は褒めるのだ。
そのとき彼奴に渡りをつけて置けば猶更だがね。

臀(しり)の視霊者

お前達はまだいつまでも其処にいるな！いかん、不屈千万な！
さあ消えろ！我が党の士は啓蒙をやって来たぞ！
悪魔の仲間奴、規則なんぞに構わんのだな。
我々はこんなに聡明になったが、それでもまだテーゲルの城には幽霊が出る。
俺は随分長いこと迷信を掃き出して来たのに、
いつまでたっても綺麗にならん、不屈千万な！

美 女

そんならもうよして頂戴、私達をうるさがらせるのは。

譬(しり)の視霊者

俺はお前達幽霊どもに面と向かって言ってやるぞ、
霊の専制なんぞ俺は受け付けはせん。
俺の霊がそれをこなし切れないからな。
(踊りやまず。)

どうも今日は旨く行きそうもないな。
でも旅行記一冊だけの土産はある、
俺が最後の一步を踏む前に、どうか
悪魔や詩人どもを退治してやりたいものだて。

メフィストーフェレス

彼奴はすぐに泥溝(どぶ)の中で腰湯を使うでしょう、
それで気を落ち着けるのが彼奴の流儀なのです。
蛭(ひる)が奴の尻っぺたをしゃぶって楽しむと、
彼奴は幽霊からも霊からも癒やされるのですね。
(舞踏の群れを離れたるファウストに。)
なぜ君はあの美しい娘を離してしまったのです？
踊りに合わせてあんなに可哀らしく歌っていたのに。

ファウスト

だって！歌っている最中にあれの口から
赤い鼠が一匹飛び出したぜ。

メフィストーフェレス

そいつは面白いや！そんなことは大したことじゃありません。
兎に角、その鼠は灰色じゃなかったでしょう。
逢瀬時にそんな事を気にする人がいますか？

ファウスト

それから僕に見えたがね----

メフィストーフェレス

何が？

ファウスト

メフィスト、君には見えるかい、
蒼褪めた、美しい子が、一人ぼっちで向こうに立っているのが？
あれはひどくゆっくりと其処から動いて行くね、
あれは両足を繋がれて歩いているらしいね。
僕は白状する----あれが僕には
可哀いグレーチヒェンのように見えて仕ようがないのだ。

メフィストーフェレス

うっちゃってお置きなさい！あれは誰にもいい気持ちがしないのです。
あれは魔法のまやかしです、生きていやしません、影です。
あいつに出っくわすのは為になりません。
あの凝り固まった眼付きを見ると、人間の血が凝り固まってしまいます、
そうして人間が石にされたようになるのです----
それ、メヅーサの話は君も聞いているでしょう。

ファウスト

どうもあの眼は、親しい者の手で瞑(つむ)らせてくれなかった死人の眼だねえ、
あの胸はグレーチヒェンが俺に捧げてくれた胸だ、

あの体は、俺が味わった甘い体だ。

メフィストーフェレス

あれは魔法ですよ、すぐに騙されるお馬鹿さん！
あれは誰にでも、その男の恋人のように見えるのです。

ファウスト

何という歓喜だろう！何という悩みだろう！
僕はあの目から別れることが出来ないのだ。
それに如何にも目立って見えるが、あの美しい頸の飾りは
たった一本の赤い組紐だねえ、
それも小刀のみね位の幅しかないねえ！

メフィストーフェレス

その通りです！僕にもそう見えます。
あいつは自分の頭を脇にかかえて歩くことも出来るのですよ、
ペルゾイスに截(き)られた頭ですからねえ----
だがいつまで迷わされることばかり好きなのです！
まあ、こっちの小山の方へ来て御覧なさい、
此処はプラターの様な賑わいですぜ。
若し誰かが僕をまやかすんじゃないかな、
実際此処には芝居がある。
おい、出し物は何だい？

ちょこまか男

すぐ又始まります。
新作です、七つあるうちの最後の狂言です。
これ位の数を出すのが此の土地の風でしてね。
横好きがこれを書きました、
横好きがこれを演じます。
旦那方、御免蒙って姿を消しますぜ、
私は幕をあげるのが横好きでしてね。

メフィストーフェレス

お前方とブロック山ででっくわすのは
至極適当だな。お前方はどうせこの土地のものだよ。

ヴァルプールギスの夜の夢

一名、オーベロンとティターニアとの金婚式

間 狂 言

道 具 方

今日は私達は一寸息抜きですよ、
ミーディングさんの腕利きの息子諸君。
昔ながらの山と湿っぽい谷、
これで舞台面はすっかり出来上がりです！

口上言い

結婚式が金になるには
五十年経っていないくはなりません。
それよりも御夫婦喧嘩が息(や)んだのが、

私には寧ろ金でございます。

オーベロン

お前達がわしの手下の霊なら、
この時こそ腕の見せ時じゃぞ。
王と王妃とは
改めて又縁組みをするのじゃ。

パ ッ ク

パックが参って、くるりと廻って、
輪舞の足を擦ります。
百人ばかりあとからついて参ります、
一緒に喜び致そうため。

アーリエル

アーリエル唱歌を指図します、
天楽に似たすがしい声で。
それは随分洗面を誘いも致します、
又優しい人をも誘います。

オーベロン

夫婦仲よく暮らしたければ、
わし達の真似をするがよいぞ！
二人が愛せにやならぬのなら、
二人をわけて置くに限るて。

ティターニア

夫がふくれたり妻がふさいだりするときは、
早速二人をつらまえて
女を南の方へ送り、
男を北の果てにやるがいいわ。

管絃楽全奏

(最強音にて)

蠅の嘴(はし)と蚊の鼻と、
それから居並ぶ眷属等(ども)、
木の葉におけるは雨蛙、草叢にすむきりぎりす、
これが楽人でござります！

独 唱

御覧なさい、彼処に風笛が参ります！
あれは石鹼玉でございます。
お聞きなさい、あの低い鼻をもれる
シュネッケ・シュニッケ・シュナックを。

修業半ばの霊

蜘蛛の脚に蝦蟇(がまがえる)の腹、
それから小人にちさい翅(はね)！
そんな生物(いきもの)ありやせぬが、
それでも小さい詩にはなる。

小さい一對

小股歩みに高跳びに、

蜜の露わけ、香をわけて。
お前はちょこちょこ行くが、
空を飛ぶには間に合わぬ。

物好きな旅人

これは仮装舞踏会の悪洒落じゃないか？
俺は眼を信じてもよかろうか？
美しい神のオーベロンを、
今日この仲間に見るなんて。

正統派

爪もなければ尻尾もない！
けれども疑う余地はないぞ----
希臘の神々と同様に、
彼奴もやっぱし悪魔なのだ。

北方の芸術家

俺が掴み得たものは、今日のところ
実際ただ略描に過ぎんのだが、
いずれそのうち時を見て、
伊太利旅行の支度にかかるぞ。

清浄主義者

ああ！こんな処へ来たのはわしの不運だ----
此処では不作法の限りを尽くしているじゃないか！
この大勢の魔女の中で
髪粉をつけているのは二人だけだ。

若き魔女

髪粉をつけて着物を着るのは
白髪頭の婆さんだけだわ。
わたしゃ裸で牡山羊に乗って
この好い体を見せて遣るわ。

大年増

私達はたしなみがいいから
此処で御前と口喧嘩はしないがね、
御前の若いすらりとした体が
そのまま腐ればいいと思うよ。

楽長

蠅の嘴と蚊の鼻と、
裸(はだか)女にたかるなよ！
木の葉におけるは雨蛙、草叢にすむきりぎりす、
拍子をちがえちゃいけないぜ！

風信旗(一方に向きて)

この上望みようのない寄り合いですね。
本当に花嫁さんばかりだ！
また独身の青年諸君も、一人一人
末頼もしい方々ばかりですね。

風信旗(他方に向きて)

若しこれで大地が口を開いて
こいつ等をみんな嘸(の)み込んでしまわなけりゃあ、
私は自分が素早く駆け出して
すぐに地獄に飛び込みたいね。

クセニエン

虫になって私達は来ています、
小さい鋭い鋏を持って。
おとうさまのサタンさまへ
身分相応の敬意を表したいので。

ヘンニングス

どうだ！奴等が密集した群れになって
素樸に巫山戯(ふざけ)合っている様子は。
おしまいには、自分達は気が好いのだなども、
随分言い兼ねないのだからな。

詩神の長

僕はこの魔女の群れの中に
喜んで交わってしまいたいのだ。
僕はムーザ達よりもこっちの方を
指図するのが無論得意だからね。

前(さき)の時代の精霊

相応な奴の仲間へはいると何かになれるて。
さあ、僕の着物の端を掴まえたまえ！
ブロック山でも独逸のパルナスでも、
随分広い嶺を持っているからな。

物好きな旅人

おい、あのごわごわした男は誰だい？
奴さん高慢ちきな歩きようをするね。
奴は嗅ぎ出せることなら何でも嗅いで廻るのだよ。
「彼奴はイエズイイト信者を捜査している」。

黒 鶴

澄んだ川で釣るのが好きだ、
濁った水でも釣り兼ねない。
それだから諸君は、敬神家が
悪魔の中にも交わるのを見られるのです。

此の世の児

そうだ、敬神家連にかかっちゃあ
何でも道具なのだ、本当だぜ。
連中はこのブロック山の上でも
随分色々と秘密会合をやっているぜ。

舞踏者達

おや。向こうから新しい連中が来るようですね。
遠くから太鼓が聞こえます----
「なあに騒ぐには及びません！あれは葦の中に鳴く
さんかのごいの斉唱ですよ」

舞踏教師

やあ、みんな足をあげるねえ！
精一杯目立たせようとしているねえ！
佝僂(せむし)はぱっと跳び、肥っちょはちゃんと跳ぶ、
どんなに見えようと構わんのだねえ。

提琴弾き

あのやくざ仲間奴、お互いにひどく憎み合っていて、
僅かのものでもわけてやるまいと思っている。
それを此処では風笛が纏めてやっているのだな、
丁度オルフォイスの琴が獣にするように。

独断主義者

大声を出したって迷わされはしない、
批判だって懷疑だって恐れるに足らん。
悪魔は或存在者でなければならぬ、
それでなければなぜ悪魔があるのだ？

観念論者

俺の心の中の空想が
此の度はあまり気儘になっているね。
実際、あれがみんな我だとなると、
俺は今日は馬鹿になっているぞ。

実在論者

あの本質がどうも俺を悩まして、
ひどく俺に苦勞をかける。
俺は此処に来て始めて
脚下(あしもと)がぐらつき出したぞ。

超自然主義者

此処にいるのは仲々愉快で、
俺はこいつ等を嬉しく思う。
悪魔というものから、善靈を
推論することも出来るからな。

懷疑論者

奴らは例の小さい炎を追跡して、
宝に近づいたと信じている。
悪魔と韻が踏めるのは惑摸(わくも?)だけだ、
だから俺は居るべき処に居る訳だて。

楽 長

木の葉におけるは雨蛙、草叢にすむ蟋蟀(きりぎりす)、
詛われた素人共だぞ！
蠅の嘴と蚊の鼻と
諸君はとにかく楽手じゃないか！

世渡り上手な人々

莫愁、というのが一団の
陽気者仲間の名前です。
もう足では歩かない時世だから、
私共は頭で歩いています。

途方に暮れた人々

これまではおべっかでもいい食事にありついて来ましたが、
併し今はあばよです！
靴には舞踏穴があいてしまいました、
私共は素足で歩いて居ります。

鬼 火

沼からわい等はやって来た、
其処でわい等は生まれたのだ。
だが、すぐに踊りの仲間入りだ、
この輝いた色男は。

隕 星

星と光り、火と輝いて
空から墜ちて来た、
今は草の中に横に寝ている----
助けて起たして呉れる人は誰でしょう？

肥 大 漢

どいた、どいた！ぐるりと避ける！
草が靡(なび)くぞ。
霊共の御通りだ、俺のような霊どもの。
霊にも肥った手足があるぞ。

パ ッ ク

そんなに高肥りして
象の子のようにして来るなよ。
今日の肥り頭は
がっしり者のこのパックさんにして置け。

アーリエル

恵みの深い自然が、霊が、
御前達に翼を御授けなされた。
私の軽やかな道に追い継げ、
あの薔薇の丘の上まで。

管弦楽団

(最弱音にて)
棚引く雲、霧の帷(とぼり)、
上の方より晴れ行く。
木の間そよぎ、葦間風立つ、
かくて皆散(あら)けぬ。

曇れる日

野

ファウスト。メフィストーフェレス。

ファウスト

みじめな目に逢っているのだな！絶望しきっているのだな！悲惨にも長い間地上をうろ
ついて今は捕らわれの身となっていようとは！あの優しい、不仕合わせな生物(いきも
の)が、悪事を働いた女だと云って、牢屋の中に押し籠められて、恐ろしい悩みに逢わ

されていようとは！其処まで行ったのか！其処まで！----裏切り者の、役に立たずの靈奴、それを俺に隠して置くとは何事だ！----勝手に立っている、立っているよ！いくらでも腹を立てて、その悪魔の眼玉を頭蓋骨の中でぐるぐる廻している！その儘立っていて、貴様の堪らない姿を見せて俺に反抗しろ！捕らわれている！取り返しのつかぬみじめな目に逢っている！呵責の靈に渡されている、裁判を敢えてする人間仲間に渡されている！そうして其の間も、貴様は俺を賺(すか)して下らない気慰みをさせて、あれの日毎に募っていく苦艱(くかん)を隠して、何の助けもなくあれを淪落に任せて置こうとは！

メフィストーフェレス

あの娘が最初の人ではありません。

ファウスト

犬奴！胸の悪い怪獣奴！----ああ、無限なる靈よ！此奴を、此の虫奴を、もう一度奴(やつ)の犬姿に変えてくれ。奴は夜になると、これまで幾度も、俺の前をちょこちょこ走って行くのが好きで、何気ない旅人の足許にころげ廻って、倒れるところを肩にとびついたものじゃないか。此奴をもう一度奴の好きな形(なり)に変えてやってくれ。そうしたら奴は俺の前で砂の中を腹で這うだろう。俺は足で奴を踏みつけて遣る、この廢(すた)れ者奴を！----あの娘が最初の人ではないと！----悲痛だ！悲痛だ！こんなことは人間の心にはとてもわからない。こういう悲惨の底に、一人ならず沈んで行ったとは何事だ。最初の者が永遠に宥恕(ゆうじょ)する者の前でのたうち廻る必死の苦をして見せたので、あらゆる余人の罪の償いがすまされないとは何事だ！俺には、このたった一人の者のみじめさが、髓と命とを搔きむしるのだ。貴様は平然として何千人のこういう運命を、薄笑いをして見送るのだな！

メフィストーフェレス

これでこちらも亦智慧の行き詰まりに突き当たったというものです、君達人間の気が狂って来ると、とかくそうなりますがね。なぜ君はこちとらと仲間になったのです、それを仕通すことが出来んぐらいなら？空は飛びたいが眩暈が怖いというわけですか？こっちが君におしかけたのですか、それとも君がこちらにおしかけたのですか？

ファウスト

貴様のがつがつした齒をむき出してそんなに俺にまくし立てるない！嘔気がするぞ！----偉いなる、莊嚴なる靈。お前は俺に姿を見せる恵みを厭わなかったのに、お前は俺の心をも魂をも知っているのに、なぜこの恥知らずな、危害を見て眼を楽しませ、淪落を自分の食養にするような奴に、結わえ付けたのだ。

メフィストーフェレス

それでおしまいかね？

ファウスト

あれを助けろ！でなきゃひどいぞ！数千年に亘って消えぬ・一番ひどい詛いを浴びせて遣るぞ！

メフィストーフェレス

僕は復讐者の掛けた絆を解く力がありません、卸した門(かんぬき)をあける力もありません。----あれを助けろ！あれを淪落に陥(おとし)れたのは誰でした？僕かね、君かね？

(ファウスト荒々しく四辺を見廻わす)

メフィストーフェレス

君は雷でも取り寄せるつもりですか？君達のようなみじめな、死ぬ筈のものに、そんなものが授かっていなくて仕合わせだ！何気なく行き逢った者を粉微塵にしようっての

は、それは暴君の遣り方ですぜ、自分の当惑の気晴らしですぜ。

ファウスト

俺を彼処へ連れて行け！どうしても助け出さなくてはならん！

メフィストーフェレス

それで君が身を晒す危険の方は？いいですか、あの町には、君の手でやった流血の罪がまだ残っていますぜ。殺された者の墓には復讐の鬼どもが飛び廻って、下手人の帰りを覗(うかが)っていますぜ。

ファウスト

まだ貴様の口からそんなことを言うか？世界中の人殺しと死とが貴様にかかるが好い、怪物奴！聞こえんか、俺を彼処へ連れて行って、あれを助け出せ！

メフィストーフェレス

君を連れて行こう、そうして僕に出来ることと云えば、聴き給え！天上地上のあらゆる威力が僕に備わっていますかい？牢番の頭を僕がぼんやりさせて遣りましょう。君が鍵を手に入れて、人間の手であの子を連れ出しなさるが好い。僕が張り番する！魔法の馬の支度は出来ている、僕は君達を連れて退く。これだけが僕に出来るんです。

ファウスト

さあ、出掛けよう！

夜

広野

ファウスト、メフィストーフェレス、黒馬に騎(の)りて疾駆し来る。

ファウスト

彼処の処刑場(しおきば)のところで、あいつ等は何をしているのだろう？

メフィストーフェレス

何を煮るやら料(りょう)るやら、僕にもわからない。

ファウスト

飛びのぼったり、飛び降りたり、身をかがめたり、しゃがんだり。

メフィストーフェレス

魔女の一団ですね。

ファウスト

蒔いたり清めたりしているな。

メフィストーフェレス

行っちゃいましょう！行っちゃいましょう！

牢屋

ファウスト手に一束の鍵とランプとを持ちて、鉄の小扉の前に立ちいる。

ファウスト

もう久しく忘れていた身震いが俺を襲って来る。
人という者の悲痛の一切が俺を攫(つか)まえる。
此処に、この湿った壁の奥にあれが生きているのだ、
あれの犯罪はただ優しい迷いだっただけに！

貴様、はいつて行くのを躊躇しているな！
貴様はあれに又逢うのを怖がっているな！
はいれ！貴様の躊躇は死を呼び寄せる躊躇だ。
(彼鍵を掴む。内にて歌う。)

私のかあさん意地悪で、
私を殺してしまったの！
私のとうさん悪者で、
私をたべてしまったの！
私の小さい妹が
骨を拾って埋めたの、
涼しい墓に埋めたの。
それで私は、美しい森の小鳥になったのよ。
飛んで行く、飛んで行く！

ファウスト(錠を開きつつ。)
恋人が耳を敬(そばだ)てていることを、あれは夢にも知らないのだ。
鐘が鳴ったり、藁ががさついたりするのを聞いていることも。
(進み入る)

マルガレーテ(床の上に身を隠しつつ。)
怖いわ！怖いわ！人が来るわ。死ぬのはつらいわ！

ファウスト(小声にて。)
黙って！黙って！僕が来たのだ、お前を助けるに。

マルガレーテ(彼の前に身を投げつつ。)
貴君も人間なら、どうぞ私の難儀を御察し下さいね。

ファウスト
そんなに大声を出すと、番人の目を醒ましてしまうよ！
(彼鎖を握りて解かむとす。)

マルガレーテ(跪(ひざまず)きて。)
まあ獄卒の貴君に、私をそんなにする権(ちから)をどなたが授けましたの！
まだ夜中なのに、もう貴君は私を連れて行くのねえ。
可哀そうだと思ってどうぞ私を生かして置いて頂戴！
明日の朝早くにしたってちっとも遅くはないじゃありませんか？
(立ち上がる)。

私はまだこんなに若いわ、こんなに若いわ！
それなのにもう死ななくてはならないのですわ！
それに私は美しくもありました、それが私の災難でしたの。
近いところに懐かしい人が居ましたが、今は遠くへ行って居りますの。
花環はむしられて、花は散々(ちりぢり)になってしまいましたわ。
私をそんなに無理に攫(つか)まえちゃいや！
いたわって頂戴！私が貴君に何をしましたの？
この御願いを無駄にさせないようになすってね、
私は生まれてから一度も貴君に御目にかかったことがないでしょう！

ファウスト
ああ僕にこの悲歎が堪えられようか？

マルガレーテ

私はもうどうしたって貴君の力にはかないません。
どうぞ赤ちゃんに御乳を飲ませる間だけ御待ちなすって。
私夜どおし抱き締めて居ましたのよ。
それを、私のいやがらせに、人が取って行ってしまいましたの、
そうして今になって、私が殺したなんて言うのですわ。
私、もう陽気になることなんて、決してありませんわ。
歌に作って私をはやすでしよう！人の意地の悪いこと！
古い御伽噺のおしまいがこうなのよ！
あの人達にその意味を解けと誰が言うのでしょうか？

ファウスト(身を投げ伏す)。

恋人がお前の脚下(あしもと)に身を伏せているのだよ、
みじめなとらわれの身を解いてあげようと思って。

マルガレーテ(共に身を投げ伏す)。

御一緒に跪いて、聖人達を御呼びしましょうね！
ご覧なさい！この階段の下に、
この敷居の下に、
地獄がにえたぎって居りますわ！
魔王が、
怖ろしくいきり立って、
ひどい音をさせて居りますわ！

ファウスト(声高に)

グレーチヒェン！グレーチヒェン！

マルガレーテ(注意しつつ)。

あれは懐かしい方のお声だったわ！
(跳び上がる。鎖落つ)。
何処にいらっしゃるだろう？私、あの方の呼ぶのを聞いたわ。
私は自由になった！もう誰にも邪魔はさせない。
あの方の御頸にとびついて、
あの方の御胸に抱かれましょう！
あの方はグレーチヒェンと御呼びになったわ！あの闕の上に立っていらしたわ。
地獄の泣きわめきや歯ぎしりの真ん中から、
いきり立った悪魔の嘲(あざけ)りの中から、
私、あのいとしい、優しい御声を聴きわけたわ。

ファウスト

僕だよ！

グレーチヒェン

あなたなのねえ！どうぞもう一度おっしゃって！
(彼に縋りつつ)
あの方だわ！あの方だわ！苦しみはみんな何処へ行ったでしょう？
牢屋の怖さは何処へ？鎖の怖さは？
あなたなのねえ！私を助けに来て下すったのねえ！
私は助けられたわ！----
私が始めて貴君にお目にかかった
あの街はもう其処に見えてよ。
私とマルテ小母さんとで貴君を御待ちしている、
あの晴れやかな御庭も、其処に。

ファウスト(伴い去らむとして)。
一緒においで！一緒においで！

マルガレーテ

まあ此処にいてよ！
夜、あなたのいらっしゃるところに、どんなにかいたいのですもの。
(撫でさする)。

ファウスト

お急ぎ！
お前が急いでくれないと、
僕達はひどい目に逢うことになるのだ。

マルガレーテ

何なの？貴君もうきすすることが出来ないの？
ねえ、ほんのちょっと私と別れていらしって、
もうきすを忘れてしまったの？
こうして貴君のお頸に縋っているのに、私なぜこんなにせつないのでしょうか？
昔は貴君の御言葉や貴君の眼付きに逢いさえすれば
天がそっくり体に落ちてかぶさって来たのに、
そうして貴君は私の息の根をとめる程きすしてくれたのに。
きすしてよう！
いやなら私がきすするわ！
(彼を抱く)。
ああ悲しい！貴君の唇は冷たいわ、
物を言わないわ。
何処へ、貴君の恋は
行ってしまったの？
私誰にとられてしまったのでしょうか？
(彼に身を背く)。

ファウスト

お出で！僕についてお出で！いい子だ、しっかりおし！
僕は千倍の熱でお前を抱いてあげる。
ただ、ついてお出でね！これだけがお願いだ！

マルガレーテ(面を向く)。

でも本当に貴君なの？でもきっと貴君なの？

ファウスト

僕だとも！一緒にお出で！

マルガレーテ

貴君は鎖を解いて下すって、
又私をお膝に抱き上げて下さるのね。
なぜでしょう、貴君が私をお避(よ)けにならないのは？----
ねえ、どんな女を助けて下さるのだから御存じ？

ファウスト

お出で！お出で！もう真夜中も過ぎてしまう。

マルガレーテ

私かあさんを殺したの、
赤ちゃんを私水に捨てたの。
あれは貴君と私とに授かったのじゃなかった？
貴君にもよ。---貴君なのねえ！本当かしら。
お手を貸して！夢じゃないわ！
貴君のなつかしいお手！ああ、でも濡れているわ！
お拭きなさいよ！なんだか
血が附いているようよ。
ああ神様！貴君何をなさったの！
剣を収めてよ、
お願いだわ！

ファウスト

過ぎたことは過ぎた事にして置いてくれ、
お前は僕の命を縮める。

マルガレーテ

いいえ、貴君は生き残って下さらなくてはいけないの！
私、お墓のことを申して置きましょうね。
お墓のことは貴君が心配して下さいね、
あしたすぐよ。
かあさんのを一番いい所にするの、
にいさんのはすぐその傍(そば)にして、
私のは少し離して。
でもあんまり離れてはいやよ！
それから赤ちゃんは私の右の胸に寄せて。
他の人は誰も私の傍に休んじゃいけないのよ！---
私、貴君のお側に寄り添うのが
本当に嬉しい、楽しい幸福でしたわ！
それが私にはもう旨く行かなくなったの。
なんだか無理にお側に寄るような気がするのよ、
貴君が私を衝き戻しそうな気がするのよ。
でもやっぱり貴君なのねえ、あんなに優しい、
あんなに懐かしいお目をなすって。

ファウスト

僕だということがわかるんなら、さあお出でよ！

マルガレーテ

外へ？

ファウスト

広々とした処へ。

マルガレーテ

外にお墓があって、
死が待ち受けているのなら、参りますわ！
私ここからすぐに果てのない憩いの床へ参りますの、
その先へは一足も行きませぬの---
貴君もうお帰りなの？ああハインリッヒさん、私も御一緒に行きたいわねえ！

ファウスト

行けるとも！その気になればそれで好いのだ！扉はあいている。

マルガレーテ

私行けませんの。どうせ駄目なの。
逃げたって何になりましょう？待ち伏せしていますわ。
乞食をしなくてはならないなんて、そりゃみじめなものよ。
それに良心の呵責まであるのでしょうか！
知らぬ他国をさまよい歩くのは本当にみじめだし、
それにつまりは攫(つか)まってしまうわ！

ファウスト

僕がついていてあげるよ。

マルガレーテ

早くよ！早くよ！
貴君の可哀そうな赤ちゃんを助けて。
ねえ！この道をどこまでも
川について上手へ、
小径を抜けて、
森の中へは行って、
左手の、栈橋のあるところの
御池の中よ。
すぐに掴んで！
浮き上がろうとしますわ、
まだ手足を動かしますわ！
助けて！助けて！

ファウスト

どうかはっきりしてくれ！
つい一歩だよ、それでお前は自由の身だ！

マルガレーテ

この山のところを早く通り過ぎたいわねえ！
あそこの石の上にかあさんが腰をかけていらっしゃる、
冷たいものに後ろ髪を掴まれるような気がするよ！
あそこの石の上にかあさんが腰を掛けて、
頭をふらふら振っていらっしゃる。
目配せもせず、肯(うなず)きもせず、お頭(つむり)が重いのだわ。
かあさんは長いこと寝(やす)んだのよ、もういつまでもお眼が醒めないの。
かあさんはお寝みになったの、私達が嬉しく逢えるように。
あの頃は仕合わせだったわねえ！

ファウスト

いくら頼んでも、いくら言っかけてきかせてもなんにもならない。
そんなら思いきってお前をかついで出るよ。

マルガレーテ

離してよ！いや、力づくじゃいや！
そんなに人殺しみたいに私を掴んじゃ駄目よ！
他のことは私、貴君にするのが嬉しくて、なんでもしてあげたじゃないの。

ファウスト

夜が明け出した！ねえ、いい子！ねえ、いい子！

マルガレーテ

夜があける！ええ、昼になるのだわ！最後の日が押し寄せてくるのだわ！
私の御婚礼の日になる筈でしたわねえ！
グレーチヒェンのところへ泊まったことがあるなどとおっしゃっちゃ駄目よ。
私の花環はこんなになっちゃった！
出来たことは仕方がないわ！
又逢いましょうねえ。
でも踊りの時じゃなく。
大勢が寄って来る、でも其の音が聞こえない。
広場も小路も
溢れるほどだわ。
鐘が呼ぶ、杖が折られる。
ああ私を掴んで縛り上げるわ！
もう首の座に連れて来られた。
私の項(うなじ)に閃(ひらめ)く白刃を、
みんながもう自分の項に感じているわ。
世界中が墓場のようにひっそりしてしまったこと！

ファウスト

ああ、俺は生まれて来なければ良かったに！
メフィストーフェレス室外に現る。

メフィストーフェレス

出かけなさい！それでないとおしまいですぜ。
愚図々々して何になります！逡巡(ためら)ったり御饒舌をしたり！
馬が身慄いする、
東明(しのめ)がさして来たのです。

マルガレーテ

地面から湧いて来るのは何でしょう？
あれだ！あれだ！あれを向こうへやって！
この神聖な場処へ、あんな人、何しに来るのでしょうか？
私をさらうのだわ！

ファウスト

お前は生きてくれなければいけないのだ！

マルガレーテ

神様の御審判(おんさばき)！私は貴方にお任せしましたわ！

メフィストーフェレス(ファウストへ)。

来なさい！来なさい！女と一緒に置いて行きますぜ。

マルガレーテ

父よ、私は貴方のものでございます！私をお救い下さいまし！
天使達よ！御身達聖なる群れよ、
私を取り巻いて、私を御護り下さいまし！
ハインリッヒさん！私、貴君を見るとぞっとするわ。

メフィストーフェレス

あれは審かれた！

声(上より)

救われた！

メフィストーフェレス(ファウストへ)。
こっちへ来たまえ！
(ファウストと共に消ゆ)。

声(内より、末細りつつ)。
ハインリッヒさん！ハインリッヒさん！